

山水と「一悟」のあいだ

—慧遠らによる「遊廬山」「遊石門」詩と謝靈運の山水詩—

堂蘭淑子

謝靈運の山水詩が「玄言詩」の山水描写と異なるのは、その時々において異なる自己の心のありようを省察することを通じて、心と景との相互作用を表現した点にあると考えられる。以前発表者は廬山慧遠と謝靈運それぞれの「仏影銘」について論じたが、本発表では慧遠及びその弟子たちの詩と謝靈運山水詩との関係性を考察する。廬山諸道人の「遊石門詩」には長文の序が付いており、「山水」を詠じるために慧遠とその仲間三十人が石門に遊行したことを描く。険しい山中をどのように進み、それに伴って景色がどう展開し、いかなる「感応」体験を経ていかなる境地に達したのかが活写されており、特に「感応」の部分は景と心の相互作用を表現している点で注目される。

一方で「遊石門詩」の詩本体には、詳細な山水描写はなく、末句では仏教が神仙思想よりも優れていることを言う。詩の末尾で自らが信じる教理の優位性を強調するのは、慧遠「遊廬山詩」や謝靈運「石壁精舎還湖中作」にも認められるが、謝詩では単純に仏教の崇高さを称えるのではなく、詩全体を通して描かれるその一場面での実践と感悟のあり方を他者に推奨している点が特異である。言うならば「遊石門詩」の序と詩の内容が一つの詩に表されており、ここに謝詩の一つの独自性がある。謝靈運はその血筋、生育環境において道教との関わりが深いが、その一方で若いころから慧遠に傾倒し、仏教を最も貴んだ。ただしその姿勢は決して排他的ではなく、多様な教理を取り入れて独自思想を打ち立てることに関心を寄せている。他の崇佛者が記さない、悟りに至る難しさや苦しさまでも表現するのは、まさに謝靈運ならではの姿勢、立場によるものと考えられる。